

箴言とはいましめとなる短い句とのことです。律法を持つイスラエルの民は、民族の特徴として、いかに生きるべきかが念頭から離れない、生真面目さ、几帳面さを持っているようです。彼らのおかげで記録され、残された多くの文献が与えられていることは、読者冥利に尽きる、いえ、ご利益があった、いえ、祝福と言っていいでしょう。短い句ですから、堅苦しさはなく、滑稽さも、寸鉄も帯び、リズムカルに言葉を紡ぐ、楽しい知恵文学です。

知恵ある者ソロモンの名を借りて、ソロモンの箴言として全体が構成されていますが、多くの賢人によって、まとめられたものでしょう。私は全体の構造を大きく二つの部分にし、それぞれに短い挿入部分を持つものと捉えて読みました。



ソロモンの宮廷 独 c.880

	題	章
1	父の諭し(1)～(9)	1章より
	知恵の勧め(1)～(4)	1:20 3:13 8:1 9:1
	格言集(1)、(2)	6:6 9:7
	愚かな女	9:13～18
2	ソロモンの格言集・ソロモンの箴言	10章より
	賢人の言葉(1)、(2)	22:17～24:22 24:23～34
	アグルの言葉	30:1～33
	レムエルの言葉	31:1～9
	有能な妻	31:10～31

二つの部分の最後に女性に関する格言が置かれていて、統一が取れているようにも感じます。「尾張名古屋は城でもつ」ではないけれども「知恵者ソロモンは女でもつ？」的なアイロニーをふと感じました。ソロモンにはファラオの娘を筆頭とし700人の王妃、300人の側室がいて、この妻たちが彼の心を迷わせた(列上 11:3)と記されています。そして、ソロモンの息子レハブアムは親の知恵を受け継がず、小心な我儘者で、結局は王国を分裂させてしまうのです。箴言の「父の諭し」をソロモンは自らに、そしてレハブアムにも伝えるべきでした。有能な妻との良い人間関係を作るべきでした。悲劇の原因を作ったのは、妻たちに迷ったソロモンでしょう。ソロモンの妻たちは王宮での地位、すなわち次期王を立てるために熾烈な戦いをし、主張をしたことでしょう。また、権力、権勢をほしいままにしたことでしょう。町の高い所に席を構えた王妃たちは「愚かな女」と言えなくもないでしょう。

愚かさという女がいる。騒々しい女だ。浅はかさともいう。何ひとつ知らない。/自分の家の門口に座り込んだり/町の高い所に席を構えたりして/道行く人に呼びかける/自分の道をまっすぐ急ぐ人々に。/「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」意志の弱い者にはこう言う。/「盗んだ水は甘く/隠れて食べるパンはうまいものだ。」/そこに死霊がいることを知る者はない。彼女に招かれた者は深い陰府に落ちる。(箴 9:13)

一方、箴言の最後に登場する「有能な妻」はルツを彷彿とさせます。

力と気品をまとい、未来にほほえみかける。/口を開いて知恵の言葉を語り/慈しみの教えをその舌にのせる。/一族の様子によく目を配り/怠惰のパンを食べることはない。/息子らは立って彼女を幸いな人と呼び/夫は彼女をたたえて言う。/「有能な女は多いが/あなたはなお、そのすべてにまさる」と。/あでやかさは欺き、美しさは空しい。主を畏れる女こそ、たたえられる。/彼女にその手の実りを報いよ。その業を町の城門でたたえよ。(箴 31:10)

箴言では、知恵と諭しをわきまえることによって正しく生きられる。未熟な者、若者はもちろん、さらに賢人も聡明な人も、宝物を求めるように、知恵を捜し求めよと勧めているのです。